



全体討論

講師：梅津政之輔
大場 寿子
小玉 重夫

コーディネーター：

奈須 正裕
木下 勇

ファシリテーショングラフィック：

町田万里子
細田 洋子

奈須（立教大学） 後半の討議に入ります。梅津さんの話にありましたが、委員の木下さんは、学生時代から三宿にかかわってきたということで、思い入れもすごくあると思います。そこでまずは木下さんに、3人の方々の報告に対して、インサイダー的な面と、研究的な面の、両方のスタンスから補足的な話をさせていただきながら、どのように全体のテーマであるまち学習につなげていくか、という辺りを出していただこうと思います。

20年以上続く太子堂・三宿のまちづくり活動

木の生長で感じた太子堂・三宿のまちの成長

木下（千葉大学） 先ほど、梅津さんが映したような時代に、大学院の学生として、太子堂、三宿で、何度か木賃アパートを転々と移り住みながらまちづくりにかかわっていました。もう20数年前のことになりまして、それだけ私も年をとりました。今は離れていますが、久しぶりに来て、トンボ広場のシデコブシの木があんなに大きくなっているのもびっくりしました。

トンボ広場は、まちづくり協議会で最初にものをつくったプロジェクトでした。いろいろな住民の反対があったけれども、話をしながらつくっていった。最初は非常に小さい木で、そんな予算もない

中でつくったものですが、見学会に参加した川越さんから「トンボ広場のシンボルツリーが印象的でした。まちに根付き、枝葉を広げている姿が、このまちの活動を現しているようでした。それだけの年月が木もまちも育てたのだと感じました」という意見をいただいています。それはうれしい印象であり、私も、途中から離れて、太子堂・三宿のまちづくりを見ていると、そういう成長が感じられます。

今日、付けている「たぬき祭り」のエプロンは、最初のころのもので、今回行ったら、皆、新調していました。それが象徴的であって、私は過去のまちづくりの時代にかかわってきていて、今は「おやじの会」の人たちが元気でした。

私がトンボ広場で餅つきをやったころは、最初は40kgぐらい、2回目は60kg、30日ぐらいかなければいけないという、大変なものを意気込んでやったのです。

何度かトンボ広場で餅つきをやってきて、みんな年をとってくると、つき手も少なくなって大変になってくる。みんな家族で来るのですが、お父さんたちについてもらうのも一苦労だったのです。今日見たら、「おやじの会」などで、「たぬき祭り」はつき手がいっぱいである。餅も、1時には売り切れてしまった。この調子なら来年は60kgでも80kgでもつけるのではないかと考えていたのですが、それだけ地域がいろいろ変わってきて、そういう営みは延々と続くものだなと思います。

対立や協力を通して地域の問題を解決
木下 実は、この太子堂のまちづくり協議会は、梅津さんが言うように、いろいろな価値観のぶつかり合いがあって、そういうぶつかり合いの協議の場であったわけです。ほかの地区で世田谷区がやっているまちづくり協議会は、地区計画ができる協議会自体も終わってしまう所が多い。太子堂は、かれこれ20数年もこの協議会活動を展開している。

実は、私も学生時代に、もう一方で、仲間と「子どもの遊びとまち研究会」を

組織して、最初は、遊び場づくりのお母さんたちの活動から、町会といろいろぶつかつて、「三世代遊び場マップづくり」などをやっていました。そういう仲間たちと、まちづくりのソフト面のお手伝いをしてワークショップなどをやってきました。

このトンボ広場の整備のときも、お母さんたちは「土の広場が欲しい、子どもたちに土の広場を」と主張して、周りの人たちから「土がグチャグチャになる」とか「落葉の掃除が大変だ」という反対の声がある中に、責任は協議会が負うからということで、子どもたちのために納得してもらった。そして、オープニングのときに、子どもらと花植えをしたのです。亡くなられた寺崎さんとか、花の得意な人たちが子どもたちに教える。

そして、プロジェクトに反対で自主管理なんかできないと言っていた山口さんが、子どもたちが喜んでいる姿を見て何かを感じたのだと思いますが、毎日水やりをやるようになってくれた。自主管理はできないと言っていた人が自主管理をするようになった。

実は、餅つきというのも、協議会が管理するので管理費が協議会に出ます。その管理費を、本来、自主管理をしている山口さんにあげようとしても、山口さんが受け取らない。だから、年末に餅つきをして、のし餅にして山口さんにあげる。それが餅つきの始まりだったのです。

今日はその餅つきが三宿側に移って、もう、つき手の心配も要らないぐらいに成長して展開しています。それも、三宿と太子堂というのは、三宿がきつね祭りなら太子堂はたぬき祭り、と、ある種の対抗意識があった。実は、間にも何回かいろいろな対立の関係もあるけれども、梅津さんなんかと、

隣り合う同士も一緒に協力しながら、マンションの反対運動やいろいろな問題を解決している。そういう地域の問題解決に高齢



社会をにらんだ展開がありました。老後も住み続けられるまちづくりというワークショップをやりながら「楽働クラブ」を展開していく。地域とは、そういうようにいろいろな問題が起こってきて、それを解決していくものなのではないか。

問題解決能力を高めることがコミュニティの再生に

木下 小玉先生が言ったことですが、私もソーシャル・キャピタルという言葉はあまり好きではなくて、コミュニティ・ガバナンスという言葉のほうが適切だと思います。日本語に訳すとコミュニティの運営です。それは町内会の本来の役割かもしれない。しかし、町内会でそういう地域社会の運営能力を持っている所はどのくらいあるか。町内会もいろいろな問題にも対応できる力を持っていないか。それとも、社会がどんどん変わって、いろいろな問題ができてきて、複雑になってきて、町内会だけでは対応できないのか。多分、後者だと思うのですが、その中で、この地域の問題解決能力、ほかの言い方では、キャパシティ・ビルディング、または、コミュニティ・ガバナンスですが、我々は、そういうものの新しい次の時代の地域社会の仕組みを考えなければいけないですね。

そういう中で、どういうモデルがいいのか、どういう将来像を描いたらいいのか、というのは、多分、この太子堂と三宿の取組みでやっているもので、いろいろな試行錯誤で町内会ともぶつかっていた太子堂2、3丁目まちづくり協議会は町内会ともつながってきた。今、協議会の会長は連合町会長になっている。そういう、何人かが重なる中で、こういう輪が繋がると容量が大きくなる。それがキャパシティ、いろいろな問題解決の能力が高まることではないでしょうか。

三宿も、サバイバルキャンプをやりながら、大場先生の話で、いろいろな人たちが学校にかかわってくる。それは、学校の教育のことも、学校の先生たちが抱えてしまうと、先ほどとは逆ですね。インクルージョンではなくて、むしろ閉じ

込めてくる。エクスクルージョンになったり、そういうことになってくる。つながることによって、教育の力も、地域の教育力を使って学校のいろいろな問題が解決してくる、子どもたちが育つ。

そういうことが、梅津さん、大場先生の例から、今日の「子どもの創造的まち学習とコミュニティの再生」というテーマに関しての答えが見てくるのではないのでしょうか。学校と地域が繋がったときのいろいろな問題解決能力を地域がつけていき、それがコミュニティの再生になるのだと思います。その辺を、理論的に、小玉先生が欧米の例からシティズンシップということで説明されました。

実は、我が国は、教育では、問題の発端は同じかもしれないけれども、例えば、今の子どもたちが公共心がないということから、愛国心とか、昔に戻るような道徳心とか、そういうところに戻ってくるような議論も一方にあるわけです。

まちづくりも、20数年ずっと続けているように永遠と続く地域社会の運営です。今でもマンション反対運動の看板などがかかっています。こういう修復型まちづくり、そして、人々がかわっていくことは、ずっと延々と次の世代に続いていく。でも、こういうものはまちの防災上の性能や道路拡幅の目的に、すぐに実効性がないとかいわれて、修復型まちづくりは国からも否定されて、むしろ、大きな道路を通せとか、都心部でやっている巨大なプロジェクトが評価される。こういう、延々とチマチマとやっているものを否定する論調が強くなっています。

それは、こういうものを議論しているときに、皆さんはこういうことを支持することに興味がある人たちだと思うのですが、日本全体の中から言うと、どちらかという、対抗する部分のほうが強いような感じを私は受けています。だから、こういうことを議論して、もう少し理論的に整理して、ほかに普及していくことが大事だと思います。今日のテーマの主題の解説代わりに説明すると、そういうことだと思います。

子どもの意見をどのように活かすか

木下 さて、そこで、個別の質問にいきたいと思います。この住まいまちづくり学習でも、子どもの参画ということで取り上げてきていますが、子どもたちが、こういう議論をしながら、対話をしながら、というのもシティズンシップの感覚をつけていく訓練だと思うのです。また、子どもの意見に大人がどう反応するかというのは、大人が子どもにシティズンシップを教えていくときの一つの大人が考えなければいけないことだと思うのです。大場先生へ、「学校の問題でいちばん大きいのは子どもの意見をどのように活かすかということだと思います。周りの大人、専門家はどのようにしたのでしょうか」という質問です。

大人の判断、情報をきちんと子どもに与えて欲しい

大場（三宿小学校） 私のクラスに昨年の「ためき祭り」のお金が750円ほど余っておりまして、カメを買うか、インコを買うか、それがずっと話題になりました。水槽の中に生きていた生き物が死んでしまっていて、そのどちらかを飼いたい。今、子どもが23人おりまして、ちょうど11対12でほぼ半分です。その中で、なぜそれを飼いたいのかという理由と、自分の考えを相手に説得するためには根拠が要る。その根拠について大人に意見を聞いてくるのは大事なことから、と言うと、子どもたちは家でアンケートをしてくるのです。父は何と言ったか、母は何と言ったか、お兄ちゃんは何と言ったか。それを日記や朝の会、帰りの会に発表させます。

お父さんは「そういうものは好みだからね」と言った。お兄ちゃんは「そういうのは思い出になるから、やらないほうがいい」と言った。お母さんは「冬を越せないわよ」と言ってカメは反対したと言った。そうすると、次の日、子どもたちの意見がまた揺れます。私は、大人がきちんとした大人としての判断、情報を与えることが一番だと思うのです。

その後、子どもたちに「自分の主張をしたいのであれば、カメがいくらかペツ

トショップに行って聞いてきなさい」と言うので、子どもたちは4人で行って、ミドリガメがいくらだか調べてくる。トリチームは「三軒茶屋にゴジマというペット屋さんがあるから」と言って聞きに行ったら、そこはトリを置いていないことがわかった。でも、そのようなことを通して子どもたちは自分の意見をだんだん変えていきます。それで、昨日はついにカメさんになったのですが、最後に女の子が泣いて「カメは私の気持なんかちっともわかってくれない、餌をやったって何も反応しない。温かさもなければ、私に何のメリットもない。このようなものを、何も反応しないものを教室で飼って意義があるのか」と、最後まで泣きながら訴えていました。「あなたの言うことはわかるけど、皆の合意でこうなったから、それはわかってよね」と言ったら、うなづいていました。「でも、先生、私の気持もわかってね」と、こういうことでまとまったのです。

私が言いたいのは、応援してくれる大人たちは、少なくとも、子どもを子どもとして甘く見ないでほしいのです。子どもは子どもで大人の考えや情報を一生懸命聞こうとしていますから、いい加減なことを言わないで、安全性や価格や飼い方を教えてあげたら、きちんと判断していこうと思います。

自分たちが決めたことは記憶に残る

大場 最後に何が大事かというので、私が一つだけいつも子どもに言うのは「安全であるか、君たちの生命には変えられない」「病気になる子をつくってまで生き物を飼う必要はない」と、最後は生命を尊く思う気持で決めていくし、直ぐ決まらなければ、決して結論を急がない。そういうような話し合いの訓練が、物の見方や考え方が豊かで分析的な子どもたちを育てるのではないかとこのころにつながり始めるような気がするのです。

私は、決して、大げさなことをやりたいわけではなくて、教育の現場の中に「学級経営」とか「集団づくり」という言葉がありますが、どの子ども住みよくて、どんな立場の弱い子の意見であっても耳を

傾けて、しかし、皆の合意の下で、先生が決めない授業でいいときには、最大限、皆で意見を言い合おうではないか、それはとても楽しいことだ、ということ伝えたいということです。

「ためき祭り」では店長という役割がすごく権限があるのですが、先ほど子どもに会って「私のときの初代店長は誰だったかしらね」と聞いたら「カワハラ君とセキ君とカラスダニさんです」と。覚えているのです。自分たちが決めたことならば、そうやって記憶にいつまでも残って、良い思い出になっているのだなと思いました。

先生と一緒にまちづくりを

木下 いま、大場先生から大人の対応、子どもを甘く見るなど。私も、まだ4年生の子どもがいて、だんだん成長するといろいろ聞いてくるのです。こちらが忙しいと、ついにいい加減な返事になってしまうのです。普段の大人の対応というのもありまして、自分もいま反省させられました。

太子堂のまちづくりでも、今日、緑道を見学した人がいるかと思いますが、子どもの絵タイルとか、子どものシンポジウムも開きました。『子どもの参画』（萌文社）という、ロジャー・ハートさんの本の冒頭に白状していますが、私自身も、最初のころは子どもをお飾りとして参加ということをやっていたという反省を強くしました。その辺も、今、この太子堂・三宿のまちづくりが成長している姿は、学校とつながり、学校のそういう子どもの心を読む先生たちと地域のまちづくりのいろいろな取り組みと一緒にする。それが、多分、今日のこういうことの方をつけていくことだと思うのです。

さて、「大人のシティズンシップは」ということの質問です。「総合学習は地域とつながっているが、大人のシティズンシップは、いまひとつ馴染みにくい」ということで、轟さんですか。ちょっと説明をいただけますか。

大人のシティズンシップを広げるには

轟（世田谷区立千歳台小学校 PTA）
4年生と中学2年の子どもがいます。上の子は、小学生のときからリンゴもぎに行ったり、地域と随



分かわりのある総合学習をさせてもらったと思っているのですが、「地域のことを理解しようと思うと、お母さんたちでもうちょっと勉強し合おう」というのが、できそうできていない。お祭りは多いし、参加も多いのです。餅つきも復活できたのですが、いまひとつ、頑張っているスタッフが固定されてしまって、どこのお祭りでも「またあなたがいる」という感じです。低学年のお母さんたちは増えている気もするのですが、普通のお母さんたちと、地域の町会の方でないお年寄りといった広い範囲まで参加ができていない、交わる機会がない。どうしたら太子堂みたいに広がるのかな、というのが4、5年ぐらい前から考えていて、太子堂では随分広がっているように前から思っていたので、いろいろな人に染み込むまで何年もかかるのはしょうがないのかなと今は考えているのです。

梅津（太子堂2,3丁目まちづくり協議会） お誉めをいただくほど広がっているわけではありません。経験的に言うと、私自身、サラリーマンで、ほとんど午前様で帰っていたので、地域のことは全く知らなかったのです。ひょんなことからまちづくりに首を突っ込んで、今でははまったと思いながら活動しています。

最初は、まちづくり懇談会を世田谷区が主催をして、私は私なりの考えで発言をしたのですが、全く予想もしないような考え方にぶつかるわけです。まずその辺の驚きから始まったわけですが、それから、その人たちが全く違った発言をするのは、私たちとは全く違う生活をしているから、価値観の違いも、私たちとの利害の違いもあるのだということにだんだん気がついてきた。

議論を重ねどうやって一致点を見出し
ていくか

梅津 もう一つ、コミュニティ・ガバナンスという体制がどういうイメージのものか私にはよくわかりません。ただ、これも一つの経験なのですが、資料にも書きましたように、世田谷区の提案に対して、自分たちはソフトの面からまちづくりを進めようということで、まちづくり協議会の設立を提案したのです。設立準備会を設けて、約半年間、会則づくりをめぐるいろいろな議論を重ねました。そのときに、私が4つの運営原則を提案して、皆さんも承認してくれたのですが、初めから承認してくれたわけではないのです。

私が「住民主体のまちづくりを目指そう」という発言をしたら、町会の役員の方から「私たち住民はまちづくりの専門知識を持っていない。だから、まちづくりはお上に任せるべきだ」という発言がありました。お上という言葉は時代劇に出てくるだけの死語だと思っていたのですが、太子堂ではまだそういう言葉が生きているのに驚かされたわけです。

その発言の後で「地域に開かれた運営組織にしよう」という提案をしたわけです。この趣旨は、他の協議会の会則を調べたところ、定員が30名とか40名でスタートしているのですが、私は、地域の人はいつでも誰でも参加できるようにすべきだということで、最低20名以上ということで、上限を決めなかったのです。役所の人たちが、「100人も200人も集まったら会場がないから困る」「連絡の仕方が大変だ」と言って反対しましたが、押し切りました。そのときに、ある町会長さんが「町会としては、このまちづくりに協力はできません」と、その理由を説明してくれました。それによると、昭和30年代に、世田谷区から太子堂で道路整備をやる話が町会の役員に内々にあって、その話が漏れたら、反対派と賛成派に分かれて町会組織が分裂しそうになった。だから、町会としては、そういう住民同士が対立する問題について組織として参加できない。「だけど、私は個人として参加して活動したい」と言ってくれました。

それを聞いていて、私は町会が参加し

ないのは組織を守るための知恵なのだなと思いました。ただし、太子堂には、3丁目に円泉寺という寺がありまして、聖徳太子をまつた御堂があるのです。これが太子堂という地名の由来なのです。ですから、古い人たちは、よく、議論が伯仲すると「和を以て尊しとなす」と言い出すのです。私は、初めから和を以てでは駄目だと。皆、生活が違うし、価値観が違うのだから、議論をしていく過程でどうやって一致点を見出だすかということがなければ、まちづくりは前に進まないと主張してきました。

言葉だけが先行する危険

梅津 コミュニティ・ガバナンス。住民自治というものをどうやったら確立できるのかということ念頭に置いてやってきました。正直言って、なかなか大変だなと思います。世田谷区が住民参加のまちづくりを謳ったのは、1978（昭和53）年の基本構想を決めた際です。1982（昭和57）年に、それを制度的に裏付ける世田谷区まちづくり条例を制定しました。この住民参加を保障する条例をつかったのが、神戸と世田谷区が最初なものですから、それ以来、世田谷区は住民参加のまちづくりの先進自治体と言われてきたのですが、実態はほど遠くなってきているのが実情だと思います。

なぜならば、私は2つの理由があると思います。職員の中で、住民参加は面倒だ、やりたくない、という意識の人が依然として多いということが1つあります。一方、住民の側にも責任があると思います。住民の多くの人は、依然として要求型、批判型です。自分たちのまちをどうするか自分たちで考える、という姿勢が非常に薄いのです。そういうことが、役所の姿勢、職員の姿勢を後退させている原因だと思います。

しかし、実態が後退しているにもかかわらず、言葉だけは先に行きます。2000年の基本計画の調整計画の中で、先ほど、小玉先生からも話がありましたように、「新しい公共」という考え方が打ち出されてきました。ですが、新しい公共論が職員の中で十分に議論され、新しい行政

のあり方が模索されているかということ、決してそんなことはありません。もちろん、住民は、こういう提案が区から出たこと自体も知らない人が圧倒的です。それにもかかわらず、今年の春の世田谷区の基本構想審議会では、「新しい住民参画の創造」という提案がなされています。参加ではないのです。参画です。言葉だけが先に走っていくことについて、私は、ほかの地域は知りませんが、太子堂の実態から考えるとやや危険だな、という感じを持っています。ただ「危険だ」と言ってしまうだけではなくて、どうやって住民が参画するだけの力を持つかということをそれぞれの地域で住民自身も考えていくべきではないか、というふうにな今の段階では考えています。

木下 轟さん、よろしいですか。難しいですよ。

轟 それを注意して、できる範囲で頑張りたいと思います。

行政が市民活動を促す触媒になるには

木下 それに関連することなのですが、川越さんから「シティズンシップ、コミュニティ・ガバナンスを育てていくためにはコーディネーター、リーダーの役割が必要と感じます。日本は、住民はいるが市民は育てていないと言った方がいます。市民の学びの場がまちづくりなのかと思いました」ということです。このコーディネーター、リーダーの役割というのは常にこういう中で出てくることです。行政の役割もあります。行政の役割、触媒ということが小玉先生から出されています。そういうものを行政が担うのか。あるいは、梅津さんが言われたように、住民の中にもいろいろな問題があり、その中で動く人、梅津さんも太子堂のコーディネーター、リーダーであると思いますが、そういうことの議論をまた後でしたいと思います。

そこで、今、梅津さんからも問題が提起されたのですが、行政の役割についてです。川越さんから小玉先生への質問で、「私の地域葛飾でも、保育の民営化の問

題を抱えています。その中で、区民の意見をどう反映させていくかが課題です。今、次世代育成計画の流れから住民ネットワークが立ち上がりつつありますが、行政としては、協働はするが批判はするなどと言っています。その中で、行政が市民活動を促す触媒になっていくためには、住民側が学び、つながるしかないのではないかと思っていますが、いかがでしょう(気の長い話になると思いますが)」ということで、これも難しい質問です。

私は葛飾区にも少ししかかわっていて、先ほど、梅津さんが、太子堂の町会は古いという話がありましたが、葛飾も町会が古い体質であり、行政要求型で、行政は町会のことを聞いて、新しい住民層の活動はどちらかというと批判的である。新住民層も、批判的な論調が強いのかもしれないけれども、町会と新住民の対立もあります。「そういう中で行政が触媒といっても」ということの意味だと思いますが、その辺はどうでしょうか。

市民、住民自身もまちに主体的にかかわる姿勢を

小玉(お茶の水女子大学) 私も、それについてはよくわからないので、先ほどの話のときに「むしろお知恵を」という話をしたのですが、その種の話は小耳にもはさむことが多くて、協働という言葉がよく使われたりします。批判はしないで協働してほしい、という態度が行政側にあるとすれば、まさに、それは、先ほど私が言った補完性の原理になると思うのです。つまり、決める主体はあくまでも行政にあって、住民や市民団体は行政ができないことを補完するということだ、という考え方です。それだけだったらいいいのですが、今まで行政がやってきたことの肩代わりという、形だけという、財政難の中であまりお金をかけられなくなった福祉や教育の領域について多くのことを民間にやってもらう。だから、意見を言う民間よりは意見をあまり言わない民間にやってほしい、という本音は多分あると思うのです。

そこで、市民の側、住民の側と行政の側との意識のずれが生まれてくるので、

それをどのように克服できるかというのは私自身の問題意識でもあるし、梅津さんの話とも絡むと思うのです。今の「市民派」とか「改革派」と言われながら出てきた区長や市長が政策で打ち出している内容のかなりの部分が、言葉としては市民の参画とか参加と言いながら、実際は、ただ単に肩代わりというか、補完という形でしか位置付けていないとしたら、むしろ、それよりは、意見も言えなかったけれども、行政が全部やってくれていた時代のほうがまだいい、という話になる。意見も言わないし、手伝いはしろということであると、むしろ、そっこのほうが悪いということになるのではないかと思っています。その辺りをどのように解決していったらいいのか、という問題がいま出てきていると思うのです。

それに対して、従来型の、私は福祉国家的と言っていますが、行政がすべてやる体制に戻ればいいのかというと、そうではないだろうと思うのです。官から民へとか、いろいろな言われ方がされていますが、行政だけがコミュニティの応援の主体ではなくて、実際にはコミュニティ自身がそこに主体的にかかわっていく、あるいは市民団体、NPO、さまざまなボランティア団体を含めてそこにかかわっていく方向に、行政の姿勢が大きく変わってきていること自体は、部分的にはあれ、評価しなければいけないと思います。問題は、それを、単なる補完性ではなくて、先程も述べたような「触媒」という形に、どうつくり変えていくかということだと思うのです。ですから、そのアイデアをいただければということだったのです。

学校、教師が地域のコーディネーターとして可能性を秘めている

小玉 1つの可能性として、本にも書いたのですが、学校が一つの可能性になることはできないのか。学校は、今、いろいろな地域に存在していて、学校の先生や教職員は中立的に物事を見られる立場の人たちなわけですから、そういう人たちがいろいろな立場の人たちの意見をコーディネートしていく。行政だけで

はなく、学校がコーディネーターの役割を担っていくこともあり得るし、その中で、大場先生と梅津さんの関係とか、学校の先生と地域のコーディネーターとの関係、あるいは行政との関係も生まれてくれば、閉じ込められた輪だったものがつながって大きな輪になっていくのではないか。

そういう意味で言うと、学校、あるいは学校の教職員が、ある意味での中立的な立場から、さまざまな対立する意見や利害を調停したりコーディネートしたりすることを、ある局面では行う。もちろん、学校の先生がまちづくりに全面的にかかわっていくということを言いたいのではないのですが、「総合的な学習の時間」とか、いろいろな間接的な取り組みの中で、結果的にそれがコミュニティ・ガバナンスのコーディネートに肯定的に作用するという、そういう働き方ができるのではないか。そういう意味で、「教師がコーディネーターに」と書いたのですが、そういうことが一つの可能性としてはあるのではないかと思います。

ただ 現実の問題として、学校自体が、例えば入学式などに行くとき歴代の町内会長さんたちが来賓で並んでいる。町内会として地域と結び付いている。しかも、町内会自体が、そこに住んでいる人たちのすべての利害を代表しているわけでは、必ずしもないということもあつたりする。そういう現状などを目にしたりすると、一般の公立学校がどこまで地域と関わっていきけるかということについてはバラ色ではないのかなと思いつつも、しかし学校というのは、少なくともそういうことができる位置にあるのではないかと思いたいし、現実にそういう側面はあるのではないかと思っています。

木下 川越さん、よろしいですか。

コミュニティ同士が大きくつながる社会に

川越(三番瀬 Do 会議) 先ほど、梅津さんが言われた、住民側が要求運動ばかりしていて、責任をとらなかつたようなことが今の世の中を生んでいるのではないか、という話は私もよくわかりま



す。確かに、学校側がそういうコーディネーター機能を持っていただければすごくありがたいと思うのですが、実際に学校の現実を見ている

と、ガードが固くてうまくかかわっていけないような状況があり、それをどのように打破するかというのも大きな課題ではあると思うのです。

先ほど、私は、行政を変えていかなければいけない、触媒にするには住民側の学びが必要ではないか、という思いで書かせていただきました。その住民同士は画一的ではなく、それぞれ、問題意識や関心事は違うと思います。今は、同じ問題意識や関心事を持った人たちがつながりつつある。例えば、保育園や学童保育の父母会などもそうですし、まちづくりもそうだと思うのですが、そういうレベルで学びながらコミュニティを育てていくことがこれからの社会に必要なのかなと。そのコミュニティ同士がいろいろな所で大きな問題でつながることが、新しい公共性を育て、そういう社会になっていくのではないかと感じます。

地域の町内会が形骸化していると言われる中で、そこに取り込まれずに自由に行き来する人たちの学びの場をつくり、育てていくことが、小玉先生のシティズンシップにかかわることかなと聞いていました。シティズンシップでは新しいコミュニティとのかかわり方があるのでしょうか。今、梅津さんなどがかかわっているような地域に根ざした活動の他、新しい市民が移動しながらあちこちでコミュニティをつくっていくことがシティズンシップの考え方の中にあるかどうか。それを最後に伺えればと思います。

住民と市民の違いは

小玉 いまお話を伺いながら、住民と市民の違いはすごく重要なポイントかなと思いました。もちろん、住民が市民になる側面と、住民ではない市民の存在があることと、両方を含めてだと思えますが、閉じられた地域の中だけで考える

のではなくて、もっと広がりを持った関係性の中で、ネットワークを考えていくことも含んで、シティズンシップとか市民という概念が、今、これだけグローバル化されている社会の中で浮上してきている一つの要因だと思います。多分、国をも超えていく可能性を含んであるのだと思うのです。今まで、シティズンというのは、イコール国民ということだと翻訳されてきましたが、そうではなくて、グローバル化されていく中で、国家を超えていくものとして、シティズンというものがこれからより重要になってくるのだと思います。

木下 葛飾区で、市民がまちづくり条例をつくらうということで、都市マスタープランづくりにかかわったまちづくりの市民がまちネットをつくっています。川越さんも、そのメンバーですから聞いておられると思いますが、そういう人たちとか一般の市民、商店街、商工会とずっと話合いをして、私も付き合って1年半ぐらいかけてまとめたまちづくり条例案があります。まさに、いろいろなテーマ型の市民団体、地域の中の子育ての問題から何から、また、町会と接点のない人でも、いろいろ提案をして同じ場で話し合う場をつくりたいと。それをまちづくり条例の中に位置付けて、そういう中で地域のいろいろな問題解決に取り組む多様な主体をつなげていこうという、そういう骨格をつくったのです。その議論に1年半かかっています。そして、今、それが町内で動くときに問題になって、今後の展開は、凍結されているのかどうか分からないですが、葛飾の中でも変えようとする意見の人たちがいる。

地域のコーディネートはそれぞれができることを

行政の役割の転換

木下 その変わり目だと思うのですが、ここで行政の転換ですが、小池さんから「社会的平等を保つということとも関連すると思うが、地域の情報を地域の人々が平等に共有することができるようにすることを行政が行っていくことが必要

だと思う」と。実は葛飾のまちづくり条例は、小池さんが言っているような場をつくりたいというのが市民の声だったのです。それを、最初は、懇談会の中でタウンミーティングという言い方をしていたのですが、国が進めているタウンミーティングと誤解するので、まちづくり会議とか、そういう場になったと思うのです。まさに、小池さんが言うような場を行政がどうつくるかということが課題です。

それから、もう1つ、中川さんから、行政の役割の転換について「まちづくり学習は子どもたちが体験学習をしていく上で自信を得、将来、大人になるための貴重な体験の場だと思う。したがって、カリキュラム改革をし、学校改革をしていくにしても、現場の教員、地域の住民が参画し、教育委員会、市長部局といった行政が学校地域に対し支援していく仕組みづくりを確立させていくことが不可欠だと思う」という意見です。補足なりがありましたらお願いします。

小池（青山学院大学） 私は現在学生ですが、朝家を出て、夜遅くに帰ってくるという生活を繰り返しています。そのため、私は住んでい



る地域で何が行われているのか全くわかっていません。ただ、そういう生活をしていても、休みの日には家にいますし、地域で行われていることが耳に入ってきたさえすれば、参加することもあると思います。しかし、地域に関する情報が一つとして入ってこないという状況で、参加するきっかけもないというのが現状だと思います。そこで、どんな人にも必ず情報が入ってくるようなシステムをつくる必要があるのではないかと考えています。

中川（武蔵野市） 1つは、小玉先生がおっしゃっていた学校を拠点としたコミュニティづくりについて、事例として、私は八王子市の多摩ニュータウン地域に住んでいるのですが、八王子市立松

木小学校と長池小学校は、学校は週5日制で土曜日は休みなので、八王子市が補助をする形で、土曜日にサタデースクールをやっています。そ



こが、保護者の方や地域の方が主体となって、英語教室とか竹馬教室とか、そういうことを運営してやっております。

多摩ニュータウン地域では、旧住民と新住民の方がいらっしゃるのですが、その意識のずれがあるのです。学校だと、子育てとか教育の話題で共通な点が結構ありますので、そういうことで地域住民の方々といろいろ連携して効果を挙げている事例があります。

それと、住民はただ単に参加して要求しているだけだ、というお話があったのですが、子どものうちからまちづくりの参画型の教育をやらないと駄目だと思うのです。そういうことを積み重ねていって、大人になった時点で、はじめて自分たちの地域についてどのように考えていくか、ということが身につく、住民が参画していくことができるのではないかと考えています。そういう意味では、まちづくり学習はすごく大事なものですし、将来、子どもたちが大人になっていく上で、本当の自立した市民への一つの手掛かりであると考えています。

最後に、個人的に思うのですが、行政のスキームづくりについては、教育委員会とか市長部局の子育て支援の課がありますが、学校の先生方や保護者の方の意見を取り入れていく仕組みが必要ではないかと考えています。例えば、カリキュラムづくりや副教本づくりは、その先生方の考え方を反映させて、場合によっては保護者の方にも入っていただいて共同してつくった上で、現場の意見を行政が組み入れていかないと、学校現場や住民と行政の乖離が出てくるのではないかと考えています。もう少し学校現場や保護者の意見を組み入れていくような仕組みづくりを、どのように構築していくかが課題ではないかと考えております。

木下 2点あったと思います。まちづくり学習の話と、カリキュラムや学校の仕組みについての現場の声、教育委員会や市長部局への民主的な手続ということですね。その辺、まちづくり学習は、今日、建築学会で本をまとめたばかりの弘前大の北原先生が来られているので、少しコメントをお願いします。後半の現場のほうは、大場先生にお聞きします。

まちを上手にたべるための「まちづくり学習」を

北原（弘前大学）最初に宣伝ですが、『まちづくり学習』（日本建築学会編、丸善発行、2004年）という本を出しました。これを使ったま



ち学習、まちづくり学習のセミナーを12月に東京でやることになっています。今の議論の中に関係する言い方として一つお話ししたいのは、私たちは、まちをつくるための学習をやってもらおうと思ってこの本をつくったとは思っていません。小学校や中学校の先生に読んでいただきたい本にしているのですが、私たちのこのスタンスは「まちに参加する、まちづくりに参加する、というのはまちをつくる専門的な知識を学んでいく学習ではなくて、まちを上手にたべるための学習である」という言い方をしています。

まちを上手にたべる学習というのは、食欲がなくなってしまうと、おいしく食べようとも思いませんし、地域のことを何も知らなければどこがおいしいかもわからない。それを知らないで、結局、どこから運ばれてきたレトルトを食べてしまっている人が自分の地域のものをおいしく食べたいと思う。それが、小玉先生の言うシティズンシップにつながっていく話だと思います。ですから、参加のときに、行政に文句は言うなと言われてしまう、という話がありましたが、それは、料理をつくって「どうでしょうか」と与えられる市民としてできる反応は「おいしい」と言ってお代わりをするか

「まずい」と言って突き返すしかないわけで、昔はそういう関係性が参加にあった。

運のいい人は、そのときに厨房に入れてもらって、つくる段階で味見をさせてもらった人もいます。でも、つくる人がいないと、たべる人だけでは物につくれない。市民はたべる人なのだと思います。ですから、舌の肥えた、つくることにも関心を持つ、地域の食材をたくさん見つけられる人を教えていく学習としてまちづくり学習を考えたい、という本にしていますので、この本は小学校や中学校の先生方に読んでもらいたいと思っています。というのは、私たちは専門的知識がないからまちづくり学習なんてできないわ、という話はそうではない。地域でしっかりと力強く生きていく子どもをつかっていくのがまちづくり学習で、それは後で効いてくるだろうという話があると思っています。

もう一つだけ言うと、地域の素材を提供することもまちへの参加だと思います。フライパンを持つことではなくて、「この食材を使ってください」と見つけることのできる子どもはまちに参加している。それは、個人的なつばやきであっても、公共性を帯びているものとみなすことができるのではないかと気もします。ですから、建築学科の学生からは、まちづくり学習というのは専門的な用語なのかしら、という話がありますが、まちをたべる人という感覚で考えていくと、参加の仕方がもっと多様に広がっていくのではないかと気がしています。

願いを共有化、お互い寄りそっていく

大場 学校がコーディネーターを担ったらどうかというご意見をいただいて、今、現場は「教師は何をやっているんだ」という声が大いい中で、ありがたいお言葉だなと思いました。専門性を活かして地域の中でそういう役割をしてはどうかということで、私はとてもうれしく思いました。もう一つは、そうは言っても、大変忙しいその現場を知っていただきたいという気持が大変強くあります。

大学の先生であっても、大学院生であ

っても、そして、どのような方であっても、1日、学校に実習に来ていただいたら、めまぐるしい学校の中の現場の様子がよくわかるかなということで、私、個人的にはそういう係を学校でやってみたい。「体験しませんか、小学校」というようなネーミングで公開はしているのですが、仕事をわかってもらえるのにはまだまだ距離があるので、そのような試みをしたらどうかな、ということをしごく思いました。

お互いにお互いの仕事を知らないというのは、例えば、私が大学生の生活を知らないとか医療現場のことを知らないと言うのと同じように、お互いが歩み寄るためには会話も必要だし、場所も必要だし、そういう所をつくることはすごく大事だと先ほどから言われています。それは、一つ、学校協議会という場を三宿小が持っていることは大変良かったかなと思います。月に1度でも、月に2度でも、学校協議会に集まってお互いを公開し合う場があることはすごく意義のあったことだろうと思いました。

それから、先ほど、わかってくれない先生もいるのだ、という声を聞いて本当にドキッとしたのですが、楽しい活動を地域の中でしたいという私の願いと、梅津さんはそれを提供してくれるということで、お互いがお互いの目標に寄りそうときに、立場は関係なく、ああしよう、こうしようということで、例えば行政側もこうしたい、学校側も支援してほしい、まちの方もこういう学校にしてほしい、お父さんやお母さんもこういう学校にしてほしいというプランニングをもっと豊かにして、どこかで目標が決まってくると、それがお餅つき大会になったり、たぬき祭りになったりするのだろうと思います。もっと願いを明確に持ち合いたいなど、私は、今日、そのことをしごく学びました。

寄りそって生きていくことはすごく大事で、そのために、もっと思いを話し合おうではないかと。大学生が情報公開してほしいと言っていたから、回覧板を工夫しようとか掲示板を工夫しようとか、学校にそういう大学生を呼んでみよう、

というつながりをつくるためには、そういう場も必要だし、願いを共有化していく討論の場が必要だけれども、何か、もっと寄りそうものをつくりたいなと思いました。

お互い無理をしないことがポイント
大場 個人的なことなのですが、梅津さんは、忙しいので無理をするな、いつも私に声をかけてくれました。それが信頼関係のいちばんのポイントだったと思うのです。お互いがより良い関係になるためには無理をしないほうがいい、やれないことはやれないと言ったほうがいいし、できないことはできないと言ったほうがいいよ、という関係が私は大変ありがたかったです。リーダーを育てることとか、会議をすることなども強制しない、自主的なものであって無理をしない、というものがあつたほうがいいなとも思いました。

最後に、地域を教材化していくのは教師本来の仕事です。地域教材をもっと勉強して、まちづくりの教材を考えていきます。どうか、皆さんが学校にもう少し近寄ってきてくれて、私たちも近寄りながら、まちづくりというものを考えられたらいいなと思います。

木下 ありがとうございます。大場先生が言われたリーダーとか、学校の先生がコーディネーターとか、そういうリーダーやコーディネーター待望論はよく出てくるのですが、そういうことではなくて、いまのお話の中にもあつたように、地域のいろいろな人がそれぞれの何らかのコーディネートをする。そういう人間を、学校がどれだけつながりをつかっていくかということだと思いますし、地域ごとにいろいろな人がいますので、まちづくりの中でもそういうことだと思うのです。ただ、行政の仕組みとしては、そういう動きに対して、先ほどのカリキュラムとか、制度の問題もあつたりするので、その辺、今回のこういうテーマから見てどうなのか、奈須さんから願います。

大人を変える子どもの力

子どもが人々を動かす

奈須 学校がコーディネーターになるという話はそのとおりだと思うのですが、コーディネーターになるときの学校というものを教師とし



なくてもいいのではないかと思います。もう一つ、学校には子どもがたくさんいます。メンバーの固定化がなくなって交流も広がるようにとか、お互いがお互いの利害ばかり言い合って相手をどこかで悪く思っているとか、そういうことを解消に向かわせる触媒に、教師ではなくて、子どもがなれないかなとずっと思っているのです。もちろん、子どもがそういう存在になるよう教師がカリキュラムをコーディネートする必要はあります。つまり、直接、人々を動かすのは子どもなのではないかなと、そして、そういう素地をつくるのが教師なり学校ではないかという気がしているんですね。

というのは、梅津さんのお話の中にありましたが、最初はやれないと言っていた人がお子さん方の姿で変わっていく。大場先生のお話の中にも、子どもがあんなに頑張るのだから、大人も損得抜きで頑張るのだ、という話がありました。以前、このフォーラムで高知の上町の小学校の野村先生にご報告いただいた実践でも、まちのすごく複雑な問題のただなかに子どもをたたき込んでしまうのです。

そこで、子どもが問題と向かい合って頑張ってしまう。みんなが逃げたり避けたりごまかしてきた問題に、子どもが真正面から向かい合っている姿にみんなが揺さぶられて、ついには大人も本気になる。大人もきちんとテーブルにつこうとする。損得や利害を乗り越えてみんなが協働しようとするようになっていったという報告でした。だから、野村先生は、総合というのは、子どもが社会を世直ししていくのだと。子どもは未来の大人だから、その未来の大人の姿で今の大人が変わるのだと言っていました。そういう

可能性はないのかなとすごく思っているのです。

大場先生の実践もそういうところがあるのではないかと思うのです。大場先生がコーディネートをしたけれども、大場先生が直接やっているのではなくて、子どもが動いて、子どもがまちを変えている。小玉先生の話で言うと、カリキュラムを変えていくことで学校が変わり、地域が変わる。でも、そこで実際に仲立ちをしている本体は子どもではないのかなという気がするのです。

というも、子どもにはすごくシティズンシップがあるのではないか。子どもにシティズンシップを育てるといのは、違うのではないかなと薄々思っているのです。幼児を見ているとあまりにも民主的で、あまりにも合理的で、あまりにも協調的ではないですか。一方ですごく自分を主張するけれども、ガーッとした後、言いすぎたねと言いながら仲良くしようしたり、思いやりを示したりしますよね。

もちろん、そのように育てているということも大事なことで、生まれてきたらいきなり民主的ではないと思うのです。でも、小さい子どもは、損得や利害の世界に生きていないから、わりと、合理的で民主的で一本気で、真っ直ぐに生きようとしていますよね。それを、危険けれども、まちのドロドロしたグチャグチャ

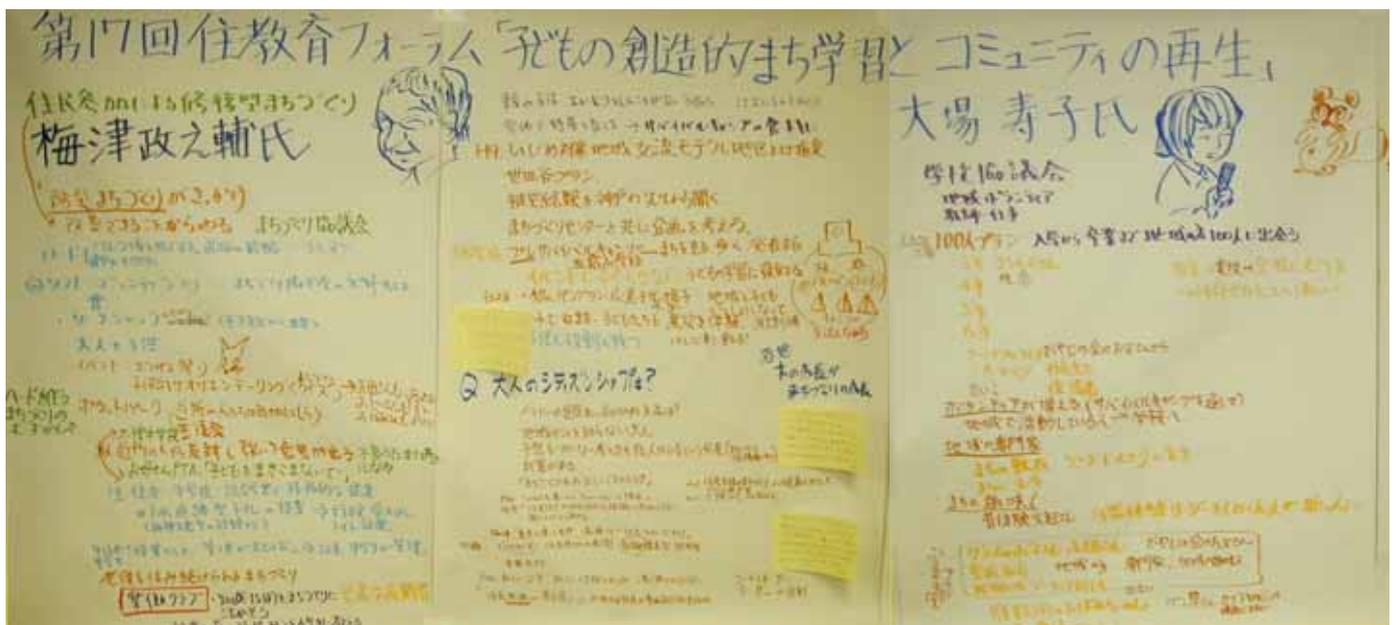
の中にとたき込むやり方を「総合的な学習の時間」ではしてもいいのではないか。教師としては怖いですがね。その辺の子どもの持つ力というのですか、まちづくりに向かって大人を変える子どもの力みたいなことは、シティズンシップとの関係でどう考えればいいのか、可能性はあるのではないかなと思って、これは大場さんと小玉先生に少し伺えればと思うのです。

子どもは地域を変えていく力になる
大場 本当にそのとおりだと思います。今日、「たぬき祭り」をしていました。フリーマーケットの場所が変わっていました。私たちが始めたころには道路側の所にお店を出しておりましたが、今年は広場の中に入れさせていただきました。見ている皆さんが、子どもがそこでやるには危ないと思ったので中に入れてくださったろうし、今日はテントが張られていました。これは、保護者の方とおやじの会の皆さんが、去年は雨が降って大変苦労しましたので屋根をつけてくれました。

子どもは地域を変えていく力になる仕事ができる、そして子どもには本来そういうものがある、というのは本当に私もそう思っています。だから、それに放り込めるような内容に出会わせていく、問題に出会わせていく。「たぬき祭り」にお

店を出そうというような単元をつくっていくことを、私たちは考えたいし、子どもが持ってくる地域の問題に子どもがもう少し寄りそっていく、という接点、そういうものをつくって放り込んでいくことは本当に大事なことだろうと思いました。

子どもと「異質な他者として出会う」
小玉 いまの奈須先生のお話を聞いていて思ったのは、どこかのプロ野球球団のオーナーが「たかが選手」と言ったのですが、行政にしても「たかが住民」とか、大人からすると「たかが子ども」とか、そういう「たかが何々」と見てしまう職能意識、教師なり、それぞれの現場でプロフェッショナルな仕事をしている人間は、どうしてもそういうように見てしまいがちなところがある。そういう捉え方を組み換えていくこと、それが、今、「異質な他者と出会う」という言い方で私なりに考えていることなのです。異質な他者として出会うことは、その他者を他者として見るということで、本当に自分とは異なる他者として見るということは「たかが何々」とは見ないことと裏腹な関係になっていると思うのです。子ども観の転換を迫っているのだなというところが、いまの奈須先生のお話の中でも出ていて、私も本当にそうだと思います。



当日のファシリテーショングラフィックより

それで、今の大人社会が直面している社会問題や政治問題に子どもが参加していく方法論について、いろいろな議論もあって、論争もあって、私自身、自分の立場をここで言えと言われても、多分、それ自体で報告を準備しなければいけなかなと思って、直ちには言えないところがあります。ただ、それについても、先ほどの中学校生徒会の話ですと、そこが一つのきっかけになって市民の意識が変化していく辺りは、大人と子どもの対立とか、教師と生徒あるいは住民との対立関係みたいなものが顕在化していく中で、大人の側の視点もまた、相対化されていくということの一つの例かなと思って聞きましたし、そういうことも含めて、対立とか利害の顕在化は、何も、地域住民の間の利害の顕在化だけではなくて、大人と子どもという世代間の関係を含んだ視点の違いとか他者との出会いということがあるのだと思います。そういう意味でも、学校というのは関係性の持っている他者性が顕在化する一つの場として重要なのだと思います。

木下 梅津さん、一言お願いします。

まちづくり活動は自分のために

梅津 いまの問題と関連するかもしれませんが、私は三宿小学校の道徳の時間にゲストティーチャーとして呼ばれました。この授業はボランティア活動をし

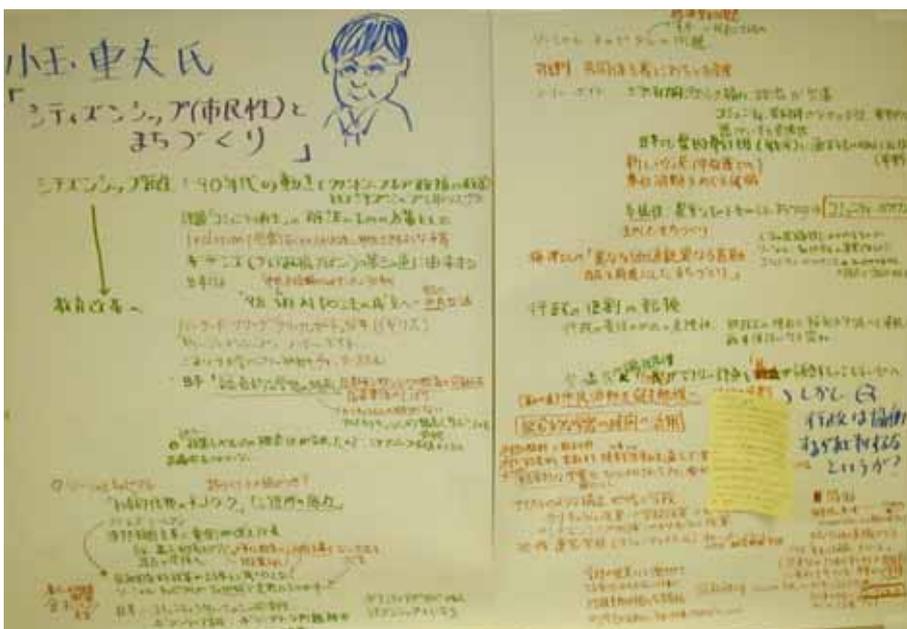
ている人を招いて話を聞こうという趣旨の授業だったわけですが、私は子どもたちから「おじさんは、なぜまちづくりのボランティア活動をしているのですか」という質問を真っ先に受けました。私は「私がまちづくり活動をしているのは自分のためだよ」と言いました。多分、子どもたちは、他人のためにやる活動をボランティアというふうに認識していたのだと思います。全員が「あれっ」という変な顔をしました。それで、「実は、おじさんたちがやっているまちづくりは防災まちづくりといって、地震がきたときにできるだけ安全なまちにしようということだ。今は、お金があれば、大きな地震がきても壊れない家がつくれる。だけど、どんなに壊れない家をつくっても、周りから火事が出たら生き残れないよ。1人だけではどうにもならないのだから、皆で助かる方法を考えようというのが防災まちづくりだよ」と。

そういう話をした後、「1人だけでは解決できない問題は、ほかでもあるのではないかな」と聞きました。4年生の女の子が、すかさず「地球温暖化」と言いました。「ほかにあるかな」と聞いたら、男の子が「ゴミ問題」と言いました。私は、思わず自分が4年生のときに何を考えていたのだろうと考え、一瞬、あっけにとられました。けれど、その後、三宿の子はすごいと思う反面、4年生の子にそ

ういう問題意識を持たせる世の中がいいのだろうかという、私自身の反省にもなりました。

今でも、世田谷区あるいは国土交通省から、防災上、太子堂の道路整備は進んでいない、もっと広い道路を早くつくれ、という圧力がかかっています。だけど、ここで生活をしていく上でそういうハードだけでは駄目だ、ということをおぼろげに感じています。これまで主張してきたし、これからも子どもの視点、子どもからいろいろ教わることがあるわけですから、子どもと一緒にまちをどうしていくかということを考えていきたいと思っています。

木下 延藤先生のまとめの時間ですが、前座として語呂合わせをしますと、三軒茶屋・三宿と太子堂を合わせて「三太」と言うのです。三という数字は、今日の小玉先生の「第三の道」という、今回のシティズンシップなどを議論するところであり、太は太子堂で先ほどの梅津さんの「和を以て尊しとなす」「その前によく議論をして」といった聖徳太子の言葉につながる。つまり先ほどの子どもたちもやっているように、よく討議をしながら、何らかの自分達でできることで問題解決していく。そういうことが基本だと思っております。それが、シティズンシップとか、そういう感覚をつくっていくことになると思います。延藤先生、よろしくお願いします。



創造・想像の自由



(財)住宅総合研究財団住教育委員会委員長

延藤安弘

NPO 法人まちの縁側育くみ隊代表理事

今日、3人の方々の主題に向けての創意溢れるお話と、皆さん方からの鋭い問題提起のやり取りの中で、触発されることがたくさんございました。議論の合間に見え隠れしていたキーワードをすくい上げて今後に備えたいと思います。

そろそろと時をかけて

「そろそろとコミュニティを育みながら防災性の高いまちづくりへ」。冒頭、梅津さんが三宿・太子堂の修復型まちづくりを20年やってきて、そろそろと時をかけながらコミュニティを育みつつ防災性能の高いまちづくりをしてきたことを話されました。効率性を重んずる行政、国は「もういい加減に修復型はやめとき」と言っているようですが、20年をかけた値打ちは、今日歩きましたように、街角にホッとする場所、木々の緑の育ち、季節柄、水はあまり青々としていませんでしたが、夏に歩くと子どもがさんざめく声を挙げているような水辺の緑道という、このまちのつくり替えにおける時の流れという成果がありありと映し出されてお

りました。これは「道路を広げるという単なるものづくりだけではなくて、モノ・カネ・制度に偏重している現代社会がまちを壊しているんや」「人ありき、暮しありき、生命ありきというコミュニティを育むことがいちばん大事なんや」ということを、20年間、太子堂・三宿まちづくりは声を挙げつつそれを形にしてきた。その視点が明確に成果として現場で確認されたとともに、今日のご発表とやり取りの中で、重要なキーワードとして「修復型まちづくりは終わりではなく、これから全国にまだまだ広げる新しい価値があるんや」ということが確認されたように思います。

ういた生活世界を地域に取り戻し、再創造しよう

これは、今日会場にお見えの橋本さん、小林さんをはじめ、「楽働クラブ」の活動が梅津さんからも紹介されました。あの映像の中に、花や緑のまちの育みとともに、寺崎さんが、子どもと食い入るようにミミズとかかわっているシーンが感動的でした。

ミミズというのは現代社会から放逐された象徴みたいなものですが、「生きとし生けるものみんながつながり合うようなまちにしようんや」というのが、子どもの視点からの創造的まちづくり、まち学習の重要なテーマとするならば、ミミズとの付合いとか人間関係とか、そういうものは「うさんくさい、わずらわしい」と全部捨ててしまった現代にあって、もう一回、うさんくさい、ういた生活世界を現実地域社会の中に取り戻そうということが今日のテーマに向かっての重要な共通作法ではないか、ということが語られていました。

小玉先生の本を読むと、ドイツのハーバマスという政治哲学者の「現代社会は高度なる政治経済システムを発達させた

けれども、その結果、生活世界を放逐してしまった。システムが生活世界を侵略している」という言葉があります。それに対して、太子堂・三宿は、生活世界という、人間が周りとかかわることによって人はより良く生きる、人は何のために生きるんや、生活世界を豊かにするためのシステムの発達を目指しているわけです。システムは手段であって生活世界が目的である。この目的と手段をひっくり返してしまった近代社会を乗り越えようとしているのが現代の創造的まちづくりであり、子どもの創造的まち学習はそこをねらっているのです。ういた生活世界を地域に取り戻し再創造する、という視点は極めて重要な、社会そのものをつくり替えるということに、先ほどの高知の事例にも挙げてありましたように、世直しそのものにつながっているんやと。こんな小さい三宿や太子堂の話を取り上げてどないするんや、というように個別解のように思われがちですが、この個別解の中に豊かな一般解がはらんでいるという、お話がみなぎっていたように思います。

ゾクゾクする教育的出会いによってコミュニティ・センスを育もう

このゾクゾクするエデュケーション・エンカウンターというのも、小玉先生のご本からの引用ですが、教育的出会いがまちづくりにおけるねらいでもあります。三宿小学校の大場先生の100人プランはメチャおもしろいなと思いましたのは、まさに、1年生で入ってから6年生で卒業するまで、100人との出会いの感動をもって、子どもが生涯何を目指して生きるんや、という生きることの大事な中身を、人との出会い、教育的出会いの中に求める。まさに、三宿小学校の100人プラン実践は、人と人のコミュニケーションの中に人が一人ひとり生きていく

よすががある、人間関係の中に子どもは育まれていく。レイチェル・カーソンは「センス・オブ・ワンダー」と言いましたが、三宿小学校の現場からは「センス・オブ・コミュニティ」「センス・オブ・コミュニケーション」という、そういう人と人のコミュニケーションの中に、人としての成長の証しが見られることを見事に実践しておられ、その具体の現れとしての活動が次から次へ、というのは大変目を見張るような思いでございました。

子どもたちは、「たぬき祭り」の準備運営の中で、疑問や不安がいっぱいというときに、「どうするんだポストイット」を100枚、200枚、どんどん張り出してこいという、この先生のやり方も素晴らしいと思いますし、三宿に限らず、三宿が発する全国への新しい教育法への呼びかけではなからうかと思えます。

ウキウキ・ドキドキする楽しい活動、共楽による私発協働の活動に参画しよう

4番目のこの「私発協働」というのは、「共同」というと上意下達的イメージがつきまといがちですが、先ほどおっしゃいましたように「力三つ、ともに汗を流そう」という「協働」。その前の「私発」というのは、一人ひとりのおやじの会や趣味人や得意技を生かそうという活動にも現れていましたし、最後の梅津さんのお話にありましたように、まちづくりボランティアは他人のためにやっているのではない、自分のためにやっているんや、私が気持ちいいからやっているんや、俺が気持ちよくなることとまちが気持ちよくなることは軌を一にしているんやと。この私発協働という、よそから押し付けられた協働ではなくて自己の内側から始まる。変革とは自己の内面から始まるのであって、自分が変わらないことには世間は変わらへん。そのためには 堅苦しい、説教じみた、ありきたりのやり方ではなくて、ウキウキ・ドキドキする共楽を大事にした私発協働の活動に参画しよう、そのときに自己も変わり、まちも変わっていくのではないか。

のっぴきならぬ時代状況を超える気分、気分はシティズンシップである

いささか現代日本における制度疲労は教育をめぐり、環境をめぐり、高齢者福祉をめぐり、さまざまな所で綻びを見出だしていますが、のっぴきならない社会が突き付けている時代状況を乗り越える精神、気分はシティズンシップだというのが小玉先生からの問題提起であり、これは現代世界史的な最前線概念である。

その概念が単なる言葉として浮いていたわけではありませんが、今日は、まさに、太子堂・三宿の実践が裏付けとなってシティズンシップに分厚い根拠が与えられたように思います。自分たちで自分たちのまちを守り育もうということが、まさにシティズンシップであり、大場先生の資料にあります「1人ではできない、しかし、みんなとなら楽しくやれる」という、1人では寂しい孤立した存在であるけれども、私発協働で一緒にやろうかと言った途端にご近所の底力が現れるではないか。「ご近所の底力を学校で経験させてみい、地域でやってみい」というのが日本版シティズンシップの概念であり、この「のっぴきならぬ時代状況を超えていく精神、気分はシティズンシップである」という、ご近所の底力の意味というのが、国際的に彼我の状況、歴史的背景は違いますが、共通したキーワードとして響きわたっていたように思います。

自慢できる思い出と友達ができれば

大場先生の資料の引用ですが「子どもたちが我慢できる思い出と友達ができれば、必ず、大人になったら異質な他者とかかわり合えるコミュニケーション・スキルを持ったシティズンシップが育っていくであろう」というのが、前半と後半の見事なあ・うんの呼吸でつながっていたキーワードでした。まち学習でのやり取り、特に、対立したときにとことん話し合ってやり取りした「カメカインコどっちを飼うんや」というときに、壮絶なる議論をしたけれども、その記憶は大人になってからシティズンシップにつな

がるであろうと大場先生は言われました。この我慢できる思い出と友達関係が子ども時代に育まれれば、必ずや、大人になってから、小玉先生が言われる異質な他者とかかわり合えるコミュニケーション・スキルを持った市民になれる。このしなやかな市民性というものが日本的シティズンシップでいちばん大事なんやで、ということを小学校の現場から発せられていることは大変示唆的でございました。

ゆるやかに多様な人々や価値観や発想の豊かさを結び合う触媒的コーディネーターとして、先生も、子どもも、市民も、NPOも育とうね7番目は特に、発想の豊かさをすくい上げ、眠っている思いがけないイマジネーションの力を引き出す、そういう触媒的コーディネーターとしては子どもがうってつけやないか。先生はコーディネーターでもあるけれども、そういうことを引き出すチャンスメーカーたれよと。子どもの潜在的イマジネーションを引き出すような役割を果たし、NPOや市民団体もそういう触媒的コーディネーターの役割を大事にしようという、この緩やかな触媒的なコーディネーターということへも実践的ヒントが与えられたように思います。

うまくいかないかもしれへんイメージを持とうね

これも大場先生の資料にあるのですが、小玉先生のお話、梅津さんのお話の中に「トラブルをエネルギーにしよう」と、対立が起こったら、とことん話し合ってきたのが今日の太子堂・三宿であると。最初に創造的なことをやるときには、うまくいかないかもしれへん、という不安とか、やりきれない思いがありますが、そういう思いを持ちながらも、しかしトラブルが起こったらエネルギーに変えていく、対立が起こったら対立を恐れずに応答を続ける。

応答が続くことによって、応答責任の意識が生まれる。レスポンスし得る能力としてのレスポンス・プラス・アピリティが応答責任としての責任意識を導き出す。こういう意味があるとすれば、

「うまくいかんかもわからへんで」と不安をかきたてながらも、不安感、危機感と戦いながら、それをエネルギーにして応答過程を楽しみながら応答責任を持つ。これがもう一つのシティズンシップの意味ではないか。トラブルをエネルギーにする、応答を楽しみながら応答責任を持つ市民性としてのシティズンシップ、これは、今日のテーマに向けて語られた、重要な、今後とも大事にしていきたいキーワードの1つではなからうかと思いません。

創造・想像の自由

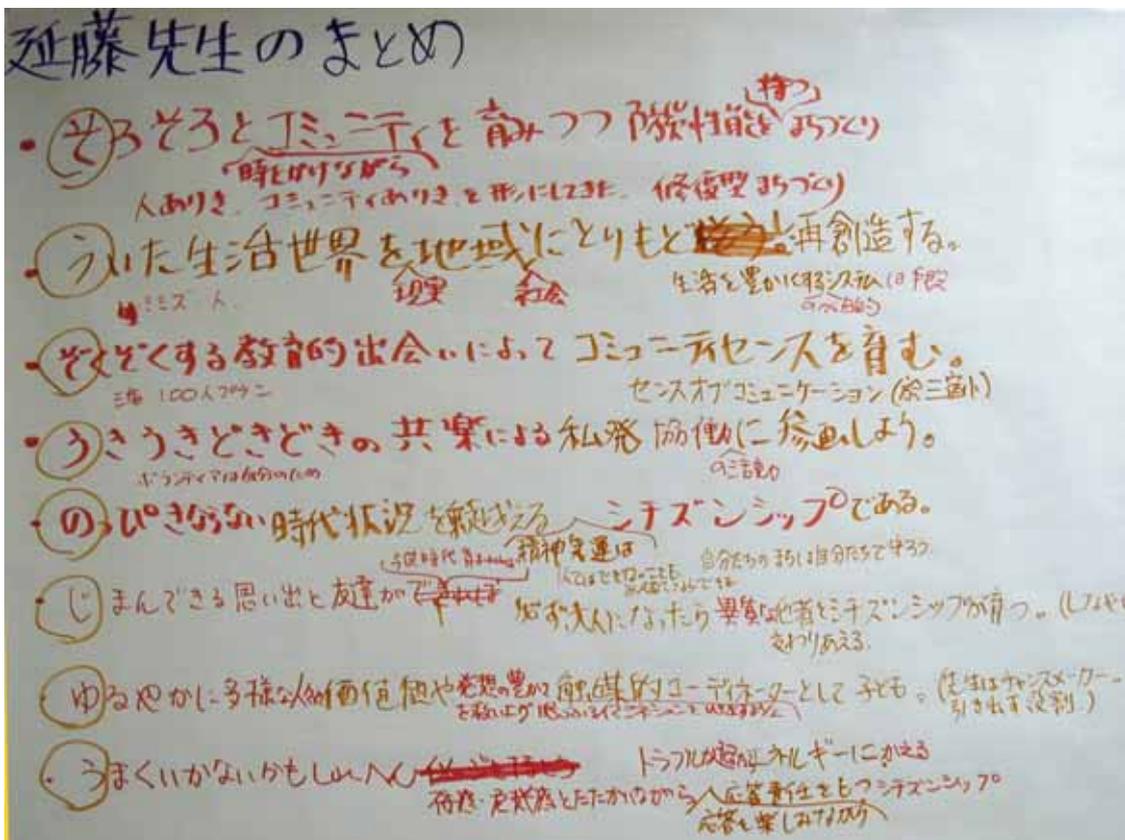
まだたくさん大事なことがあります。ちなみに、このキーワード8つの頭文字を縦に読みますと、「創造の自由」というもう一つのキーワードにつながるわけございまして、まさに、テーマに向かったのいちばん重要なキーワードは自由ではないか。

「自由の創設」というのは、小玉先生のご本にあるハンナ・アーレントの重要な概念ですが、まさに、やりきれない状況を乗り越えていくための「そうぞうの自由」というものはフリーダム・オブ・クリエイションという意味での「創造の自由」と、もう一つは、フリーダム・オブ・イマジネーションという意味での「想像の自由」という、二重の意味での「そうぞう」の自由が今日の皆さん方のお話の中に響きわたっていたように思います。

前例にない新しい状況をつくろう。単なる行政の補完的役割を果たすのではなくて、批判的協働、批判的乗り越えという創造の自由を享受しようではないか、という呼びかけがお三方からなされたとともに、子どもたちは、あのフリーマーケットで、我々大人が1,000円ぐらいするだろうと思うものを、20円という破格の値段にする。あれが子どものイマジネーションではないか。現代の大人は貨幣

という価値によって人間関係をとりもっていますが、子どもたちは、貨幣という手段よりも「お互いに最も気持ちよくなるうね」「お互いに最も気持ちよく生きようね」という、この人間的コミュニケーションという想像力への翼を広げていたのが、大場先生のエピソードの語るところではなからうかと思えます。

そういう意味で、いまだ見ぬ世界に対して、イマジネーションという、人間が内に隠し持っている最大の資源としての想像力の翼を広げられるのは子どもであり、子どもはまさに未来の意思決定者であり、今日のテーマを掲げたのもそういう視野をもって臨んだわけですが、三人の方々の示唆に富むお話と、皆さん方からの多様なご意見、やり取りの中で、主題に向かってお互いに共有できるような方向感を分かちあえたということをもって終わりにしたいと思えます。ありがとうございました。



当日のファシリテーショングラフィックより

見学会
レポート



地域の雰囲気を感じながら歩く

フォーラムに先駆けて、世田谷区太子堂・三宿地域と、「ためき祭り」(主催:三宿一丁目地区まちづくり協議会)の見学を行った。

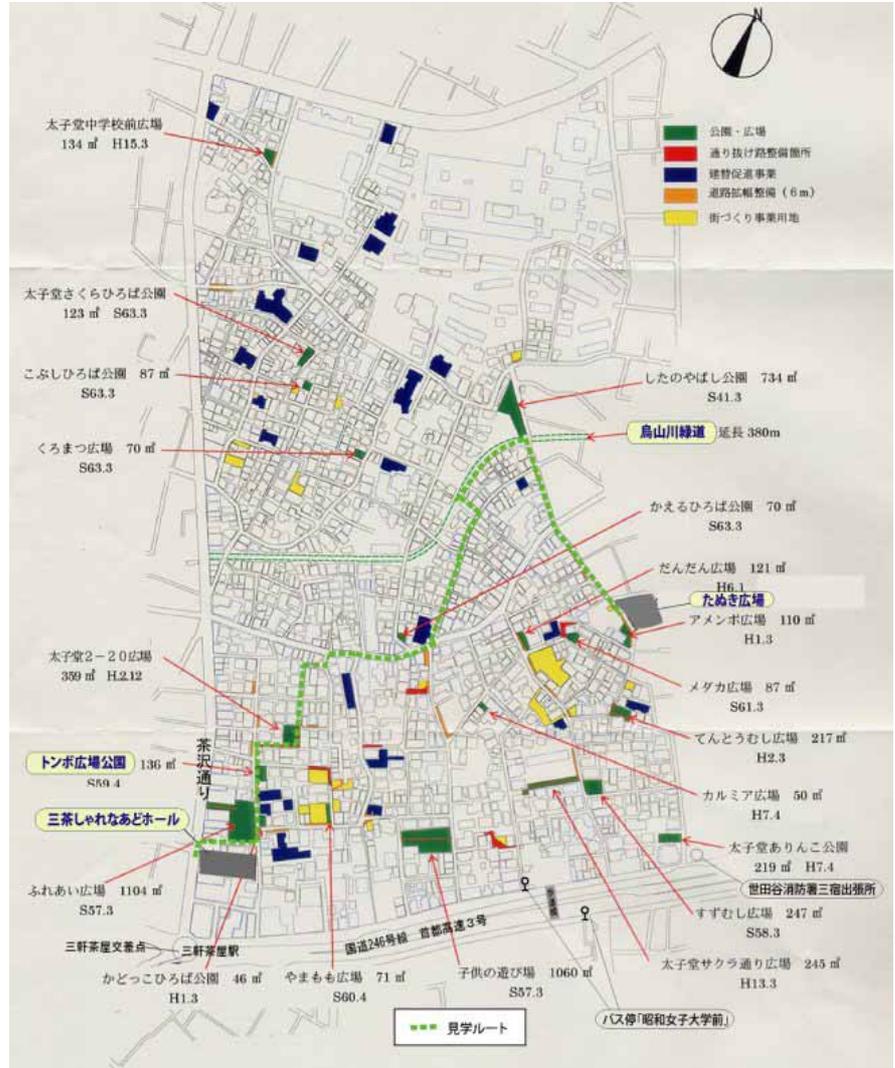
フォーラム講師の梅津政之輔氏(太子堂二,三丁目地区まちづくり協議会)と木下勇委員(千葉大学助教授)の解説で、総勢 20 名の参加があった。(見学ルートは右図)

ポケットパーク ()

防災まちづくりの一環として住民参加で計画づくりを行ったポケットパーク(小公園)第一号の「トンボ広場」を見学した。当時は小さかったシンボルツリーのシデコブシの木が枝葉を広げ生長し、時間の流れが感じられた。

烏山川緑道 ()

太子堂地区に位置する烏山川緑道の再整備にあたっては、3年に及ぶ沿道住民との息の長い話し合いの中で、問題を解決し、せせらぎをはじめ子どもたちの絵タイルや井戸などもつくられた。



見学会地図(世田谷区世田谷総合支所街づくり課作成「まちづくり事業実績マップ」より)



当時は細かったというトンボ広場のシンボルツリーも生長して立派に



解説役の木下勇委員(左)と梅津政之輔氏(右)



烏山川緑道のせせらぎの前で

「たぬき祭り」()

今回で 14 回目となる「たぬき祭り」では、三宿小学校児童によるフリーマーケットや、「おやじの会」など地域の方によるお餅つきの様子を見学した。お揃いのたぬき色の上着を着た地域の方々が「たぬき汁」やお餅、ポップコーン、綿飴などを売っている中で、子どもたちも声をはり上げ持ち寄ったカードやぬいぐるみ、本などの販売に精を出していた。

子どもから大人まで、地域全体でつくりあげている「たぬき祭り」や地域づくりを見学して、年数を重ねてきたからこそできるさまざまな知恵と地域力を実感させられた。

* 太子堂・三宿地域の防災まちづくり等の詳細は、本文（講演 1：梅津氏、全体討論：木下委員）をご参照下さい。



大勢の人でにぎわう「たぬき祭り」



子どもたちによるフリーマーケットは、カード、本などコーナーに分けて販売



地域の方によるお餅つき

住・まちづくりフォーラムかわら版 17 ©

発行日 2005年1月20日（非売品）

(財)住宅総合研究財団

住教育委員会 = 延藤安弘, 小澤紀美子, 木下勇, 町田万里子, 細田洋子, 奈須正裕
(事務局) 永田一雄, 平井なか, 岡崎愛子

発行人 峰政 克義

発行所 財団法人 住宅総合研究財団

〒156-0055 世田谷区船橋 4-29-8

TEL 03-3484-5381 FAX 03-3484-5794

URL: <http://www.jusoken.or.jp>

E-mail: jusoken@mxj.mesh.ne.jp

